

1. 瀬戸内海が育んだ海文化

瀬戸内海は、穏やかな気候風土のため古くから人の営みが行われており、各地に色々な時代の遺跡や文化財が数多く残されている。古くは、国生み神話、神武天皇の東征神話、神功皇后の三韓出兵など、古事記、日本書紀、風土記などに見られる神話や伝説が生まれた。また、古墳時代には、岡山地方において吉備国が栄え、砂鉄を利用した製鉄が盛んに行われ、武器、農機具などが生産されるなど大和朝廷に対抗できるほどの大きな勢力を誇っていた。飛鳥時代には、大和朝廷が日本を統一すると遣隋使、遣唐使など海外との交流が始まり、瀬戸内海は大和から中国への海上交通のルートとなった。奈良時代になると、地方の管理のため役人たちの往来が多くなるにつれて、万葉集などに見られるように、歌枕として瀬戸内海が詠まれ、その後、古今和歌集などに受け継がれるなど、知名度が上がってきた。代表的な歌枕となった地名としては、難波、須磨、明石、高砂、生田、布引などがあげられる。

近世になると、庶民の旅が盛んになり始め、平家物語や太平記などに出てくる地名（屋島、赤間関、壇ノ浦等）が名所・旧跡として有名になってきた。また、社寺参詣や信仰の旅も盛んになり、厳島神社、金刀比羅宮、住吉神社、宇佐神宮への参拝や四国八十八ヶ所巡りが広まってきた。この神社仏閣へ参詣する人たちに、富くじや浄瑠璃やお祭りなどの余興が開催されるようになり、瀬戸内海が文化的に賑わった時期でもあった。

この様に古くから多くの人々が行き来してきたが、この自然景観の美しさは、日本人よりも江戸時代から明治時代にかけて瀬戸内海を航行した外国人から称賛されてきた。つまり、日本人は精神的なよりどころである伝統的な風景として瀬戸内海の価値を見出していたが、外国人の考え方に影響を受けて、自然の景観と一緒に視覚を大切にするようになった。その具体例としては、以下の写真に示す、塩飽諸島を始めとする多島海美、鳴門の渦潮、鞆の浦等の港町の景観、自然と一体化した厳島神社等の神社仏閣、伝統的に営まれる棚田風景などと言われている。



塩飽諸島(香川県)



宍川海岸(岡山県)



鳴門の渦潮(徳島県)



厳島神社(広島県)



室津港(兵庫県)



周南市の棚田(山口県)

また、この瀬戸内海という地名は、明治中期以降に定着したといわれている。明治時代以降来日したリヒトホーフェンなどの外国人が、瀬戸内海を航行する度にその多島海、以下に示す白砂青松等の景色の素晴らしさに驚き、旅行記などで紹介したことが始まりだといわれている。その後、1934年には日本最初の国立公園として瀬戸内海の名前で指定されたことから、日本人の間にも瀬戸内海という地名が定着することになった。

瀬戸内海で生まれた文化は、「瀬戸内海には、海の文化、石の文化、塩の文化、花の文化、遍路の文化、神社の文化など、自然環境と一体となった環境文化が根付いてきたと言われており、原生林

の様な大自然は無いが、自然と調和した里海の漁村、里地の農村、里山の山村などの営みが中心となってきた。現在も、瀬戸内海は自然と歴史と文化が渾然となった重層的で多様な風景をもっている。(瀬戸内海辞典、南々社、137-149頁、西田正憲より)」と、総括されている。

瀬戸内海における水環境を基調とした海文化の区分と具体例を示した分類を表1に示す。

表1 瀬戸内・海文化の区分表 (瀬戸内海の水環境をベースとした例)

海文化の区分	具体例	関連項目
食文化	ハモ、タコ、アナゴ、タイ、サワラ、イワシ、イカナゴ、サツパ(ママカリ)、トラフグ、アジ、サバ、タチウオ、エビ、アサリ、カキ、ハマグリ、ワカメ、ノリ	主な漁獲物
	鯛(各地)、タコ(各地)、アナゴ(各地)、ガザミ(各地)、エビ(各地)、沼島のハモ、紀ノ太刀、鳴門ワカメ、クエ、藻貝、広島カキ、下関のフク、関アジ・関サバ、城下カレイ、讃岐でんぶく、サワラ、シラス(各地)	ブランド魚介類
	泉だこ、イカナゴのくぎ煮、ママカリ、デベラ、コノワタ、クチコ、海老味噌、サワラのカラスミ、イリコ、イギス豆腐、じゃこ天、たこ飯、りゅうきゅう、鯛飯、鯛そうめん	ブランド加工品、料理
	鯛の縛り網漁、タコ壺漁、一本釣り漁、イワシ網漁、サワラ刺し網漁、板びき網漁、アビ漁	伝統漁具、漁法
	各種寿司、炊き込みご飯、讃岐うどん、素麺、茶粥、お好み焼き、たこやき	地域固有の食文化
伝統行事・文化	お遍路、石風呂、浄瑠璃、神楽、念仏踊り、盆踊り、祇園祭、管弦祭、天神祭、権伝馬競漕	
石の文化	石の信仰、段々畑の法面補強、築城の石垣、港の波止、雁木、灯笼等、サヌカイト、黒曜石	
塩の文化	製塩方法(藻塩、海水直煮、揚げ浜式、入浜式、流下式、イオン交換式)、十州塩、三白	
自然景観と文化景観	来島海峡、鳴門海峡、関門海峡、屋島、備讃瀬戸、和歌の浦、防予諸島、芸予諸島	多島海美、瀬戸
	安芸灘、燧灘、備讃瀬戸、備後灘、播磨灘	藻場
	中津干潟、曾根干潟、秋穂海岸、新舞子海岸	干潟
	鞆の浦、御手洗、倉敷美観地区、西条、竹原、柳井、室津、長府、門司港駅	町並み景観
	奈多、虹ヶ浜、包ヶ浦、桂浜、志島ヶ原、洪川、観音寺、白鳥神社、津田、慶野松原	白砂青松
広島県鹿島、安芸津町、山口県周防大島、香川県小豆島、愛媛県遊子(ゆず)水荷浦	段々畑	
信仰の文化	厳島神社、大山祇神社、金刀比羅宮、住吉神社/大社、生島(大避神社)、エビス信仰	
希少生物種	スナメリ、アビ、カブトガニ、ナメクジウオ、ハクセンシオマネキ、アオギス、海浜植物等	
公害の歴史	赤潮、油濁事故、ダイオキシン等有害物質	
海洋レジャー・クルージング	奈多、黒島、瀬会、室積、虹ヶ浜、片添ヶ浜、県民の浜、松原、本島泊、女木島、洪川、沙弥島、慶野松原、大浜、浦、片男波、浪早等	海水浴場
	瀬戸内海航路(関西～九州、中国～四国、九州～四国他)	海の駅

2011年7月20日に、環境大臣から中央環境審議会会長に対して、「瀬戸内海における今後の目指すべき将来像と環境保全・再生の在り方について」の諮問が行われ、2012年10月に、同審議会会長より環境大臣へ答申された。今後の瀬戸内海の水環境保全・再生の基本的な考えは、

- ①きめ細やかな水質管理(湾灘ごと、季節ごと) ②底質環境の改善
- ③沿岸域における良好な環境の保全・再生・創出 ④自然景観及び文化的景観の保全
- ⑤地域における里海づくり、科学データの蓄積及び順応的管理のプロセス導入(共通事項)であった。

また、2007年度水産白書には、「伝えよう魚食文化、見つめ直そう豊かな海」という特集記事が掲載されており、海文化の一部として位置付けられる魚食文化を紹介している。この記事によると、日本は、文化の中に水産物が溶け込んでおり、正月の田作り、海老、昆布巻き、数の子などが、お祝い事には尾頭付きの鯛が欠かすことのできないものになっている。このことは、昔から日本人が水産物を余すことなく利用し、知恵を出して美味しく食べられる食品に加工してきたためである。日本食は、健康的、美しさ、安全性、高品質であることが海外の人たちに受け入れられ、世界各地に広がり始めている。とりわけ魚食文化が世界に広がっており、寿司はその代表例として知られている。また、この白書には、国内の水産物を利用した郷土料理が紹介されており、瀬戸内海では、ままかり寿司(岡山県)、ふく料理(山口県)、宇和島鯛めし(愛媛県)、プリのあつめし(大分県)等が紹介されている。